

ホッカイドウ競馬のご紹介



1 はじめに

〔北海道地方競馬運営委員会資料〕



道庁が競馬事業を始めたのは昭和23年。戦後の復興期のもと、娯楽が少ない中での競馬開催に、多くの道民が詰めかけたとされています。

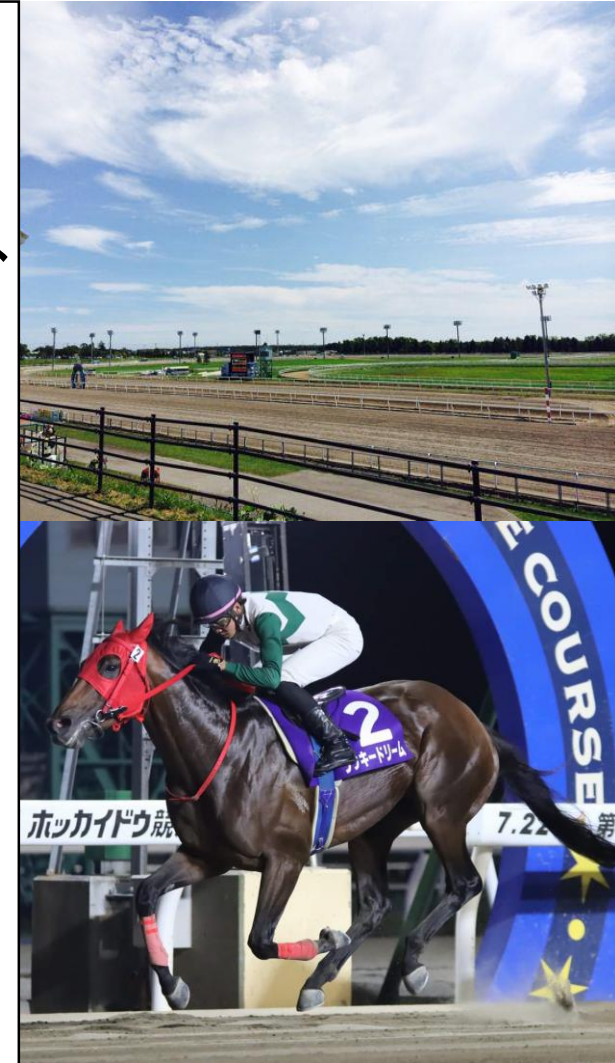
開始から290億円を一般会計に繰り出してきた競馬事業ですが、景気低迷やレジャーの多様化などにより、平成4年以降は赤字決算が続いてきました。

道ではこうした、赤字体質からの脱却を図るため、平成20年に「北海道競馬改革ビジョン」を定め、**産地主導による組織再編や門別競馬場への集約、ナイター化などに取り組みました。**平成23年には将来の経営安定化をめざす「北海道競馬推進プラン」を策定、**インターネット発売の拡大やJRAとの相互発売などの改革に取り組んだ結果、平成25年度以降は単年度収支が黒字化し、経営が改善してきました。**

また、令和3年3月に策定した第3期「北海道競馬推進プラン」では、競馬事業を将来に向けて安定的に運営できる環境を整えるため、老朽化したきゅう舎などの施設を整備することで、働きやすく安全・効率的に競馬が実施でき、より多くのファンがこれまで以上に楽しめる競馬場づくりを進めることとしています。

「ホッカイドウ競馬オフィシャルウェブサイト」
<http://www.hokkaidokeiba.net/>

令和5年3月
農政部競馬事業室



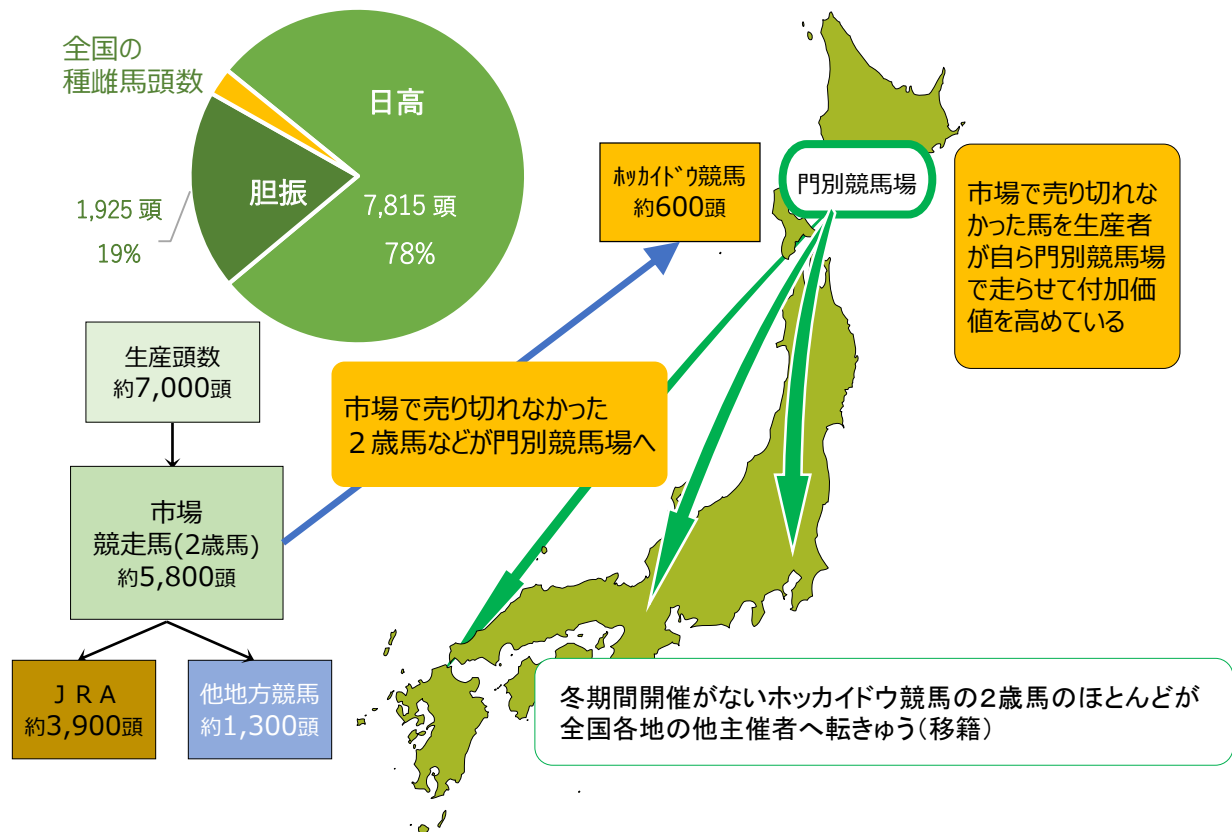
2 ホッカイドウ競馬の姿

(1) 馬産地に立脚したホッカイドウ競馬の役割

- 北海道は全国の競走馬の**98%**を生産、そのうち日高・胆振が**97%**を占めています。
- 馬産地に立脚したホッカイドウ競馬は、「全国への競走馬の供給」や「軽種馬産地のセーフティネット」の役割を担っていることに加えて、屋内調教用坂路の効果により強い馬を輩出し続けており、地方競馬を下支えする役割が期待されています。

日高・胆振は全国へ競走馬を供給

ホッカイドウ競馬は馬産地のセーフティネット

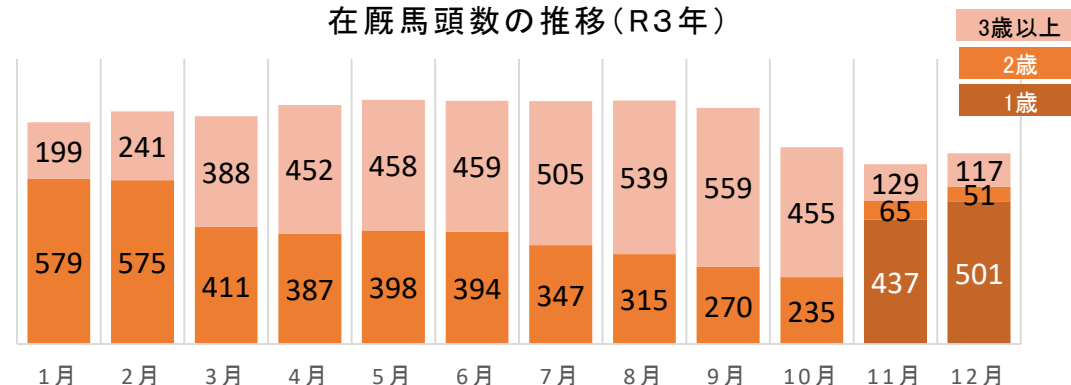


ホッカイドウ競馬は、馬産地日高・胆振の基幹産業を下支えしていることから、競馬界や地域のために今後も競馬事業を継続していくことが不可欠

(2) ホッカイドウ競馬の在厩馬

- ホッカイドウ競馬には、約750～800頭の軽種馬が在きゅうし、2歳馬の割合が高いという特色があります。
- 全国で生産される軽種馬の約1割に近い頭数の1歳馬が11月以降に入りきゅうし、調教された後、翌年の2歳馬戦に出走します。デビューした多くの2歳馬が、JRAや他の地方競馬に転きゅうしていきます。

在厩馬頭数の推移(R3年)



(3) 従事する関係者

- ホッカイドウ競馬では、調教師をはじめ、騎手、厩務員などの数多くのきゅう舎関係者が働いています。
- 競馬事業の実施により、投票窓口の従事員や警備、清掃などの委託業務として数多くの雇用を生み出しています。(門別競馬の直接関係者は約1,200人、関連産業関係者を合わせると全体で約2,400人規模)

区分	きゅう舎関係者※1			馬主※2
	調教師	騎手	厩務員	
全国	423人	278人	2,178人	5,199人
うち道営	29人	19人	180人	332人

※1: 地方競馬全国協会「地方競馬に関する資料」
(調教師及び騎手～令和4年4月1日現在、厩務員～令和4年3月1日現在)

※2: 北海道馬主会調べ(令和4年4月現在)

3 沿革

かつてのホッカイドウ競馬は道内各地の競馬場を移動して実施するスタイルでしたが、平成22年からは門別競馬場 1 か所での開催となっています。一方、平成13年度以降は場外発売所「A i b a」の拡大を図り、現在、全道各地に16か所設置しています。

和暦年度(西暦)	主な沿革
S23 (1984)	競馬法改正により道営競馬開始
S48 (1973)	北海道競馬事務所設置
S51 (1976)	社団法人北海道軽種馬振興公社発足
S57 (1982)	門別トレーニングセンター開所
S60 (1985)	電話投票開始
S62 (1987)	「道営競馬」から「ホッカイドウ競馬」に改称
H3 (1991)	発売額・入場者とも過去最高
H4 (1992)	赤字化に突入
H10 (1998)	地方競馬共同在宅投票システム導入
H13 (2001)	単年度赤字最大、ネット発売開始、ミニ場外新設
H18 (2006)	S P A T 4 で発売
H19 (2007)	北海道競馬改革ビジョン策定、楽天競馬で発売
H21 (2009)	門別ナイター化、北海道軽種馬振興公社へ事業委託
H22 (2010)	北海道競馬推進プランの策定、門別 1 場化
H23 (2011)	地方競馬トータルゼータシステムへの参画
H24 (2012)	屋内調教用坂路竣工、J R A 馬券の発売開始
H25 (2013)	2 2 年振りの単年度収支黒字化
H26 (2014)	トリプル馬単導入
H27 (2015)	内回り走路竣工、第 2 期北海道競馬推進プラン策定
H28 (2016)	照明LED化
H30 (2018)	北海道胆振東部地震、9/6～9/20開催停止
R1 (2019)	新型コロナウイルスのため場外発売所休止(R2.2.27～)
R2 (2020)	発売額過去最高更新、第 3 期プラン策定、JBC2歳優駿初開催
R4 (2022)	発売額過去最高を 3 年連続更新

年度	開催場							備考
	岩見沢	旭川	帯広	札幌	函館	北見	門別	
S33～	○	○	○	○	○	○		6場開催
S41～	○	○	○	○	○			年により、3～5場開催
H4～	○	○	○	○				
H7～	○	○	○					
H9～	○	○	○	○			○	門別開設
H10～		○		○			○	
H21～				○			○	
H22～							○	門別 1 場

年度	再編状況	場外発売所数
H12 以前	ハンス岩見沢(S63～) 旭川レーシングセンター(S62～)	2
H13	Aiba(以下同様)静内	3
H14	苫小牧	4
H15	小樽、滝川、浦河	7
H16	中標津、留萌、札幌駅前	10
H17	千歳、函館、江別	13
H20	石狩、▲留萌	13

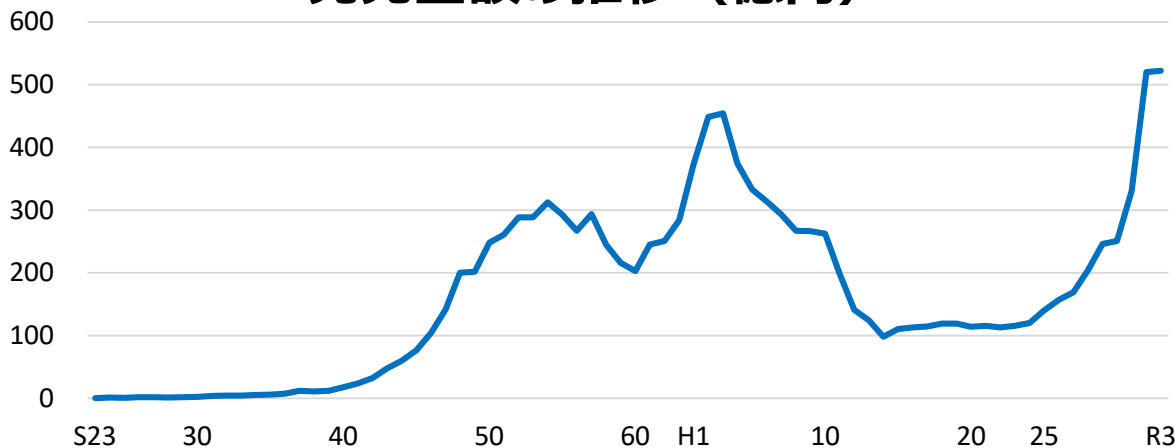
年度	再編状況	場外発売所数
H21	札幌中央、登別室蘭、琴似	16
H22	釧路	17
H23	▲琴似	16
H27	▲札幌駅前	15
H30	札幌駅前 (キャッシュレス機初導入)	16
R 4	▲ハンス岩見沢	15

4 収支の推移など

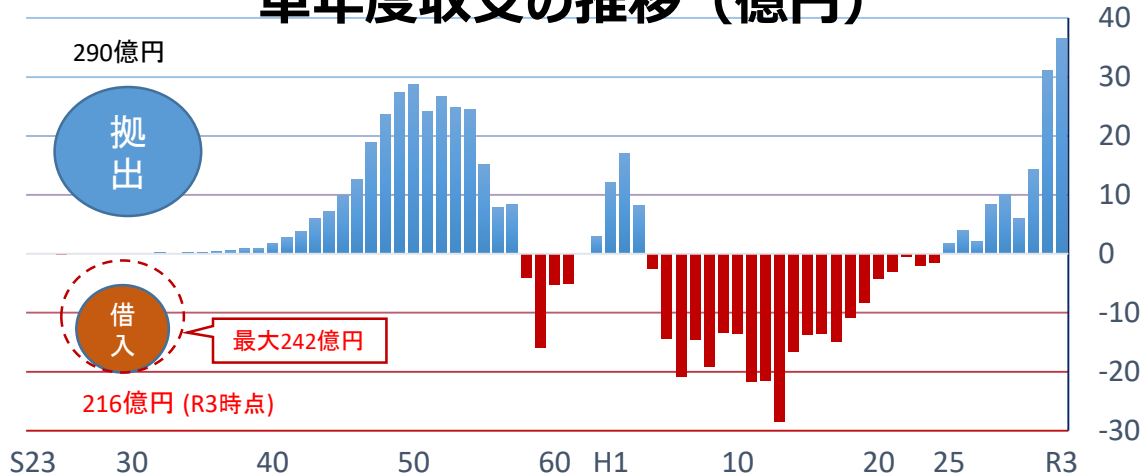
ホッカイドウ競馬は昭和23年に始まって以来、これまで発売による益金約290億円余りを道の一般会計に繰り出してきました。また、平成3年度には454億円と過去最高の発売額となりましたが、翌年度からはレジャーの多様化などの影響もあり、以後、赤字決算が続きました。道では、こうした赤字体質から脱却を図るため、平成20年以降、様々な改革を進めてきた結果、平成25年度に22年ぶりに単年度収支が黒字化した以降は発売額が伸び、令和4年度にはコロナ禍による巣ごもり需要も後押しし、過去最高の527.7億円を記録しました。

近年の発売成績は、道内発売が減少し、一方でインターネット発売の割合が多くなってきています。また、場外発売所においては、ホッカイドウ競馬本体に加え、JRAや他の地方競馬など他主催者の馬券発売に伴う手数料収入（業務協力金）の確保に努めています。

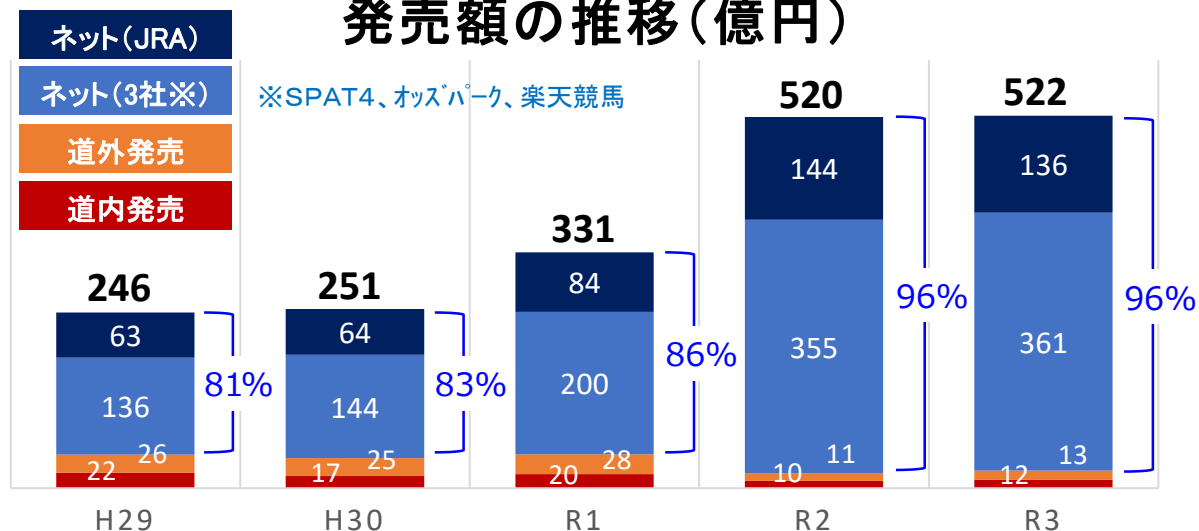
発売金額の推移（億円）



単年度収支の推移（億円）



発売額の推移（億円）

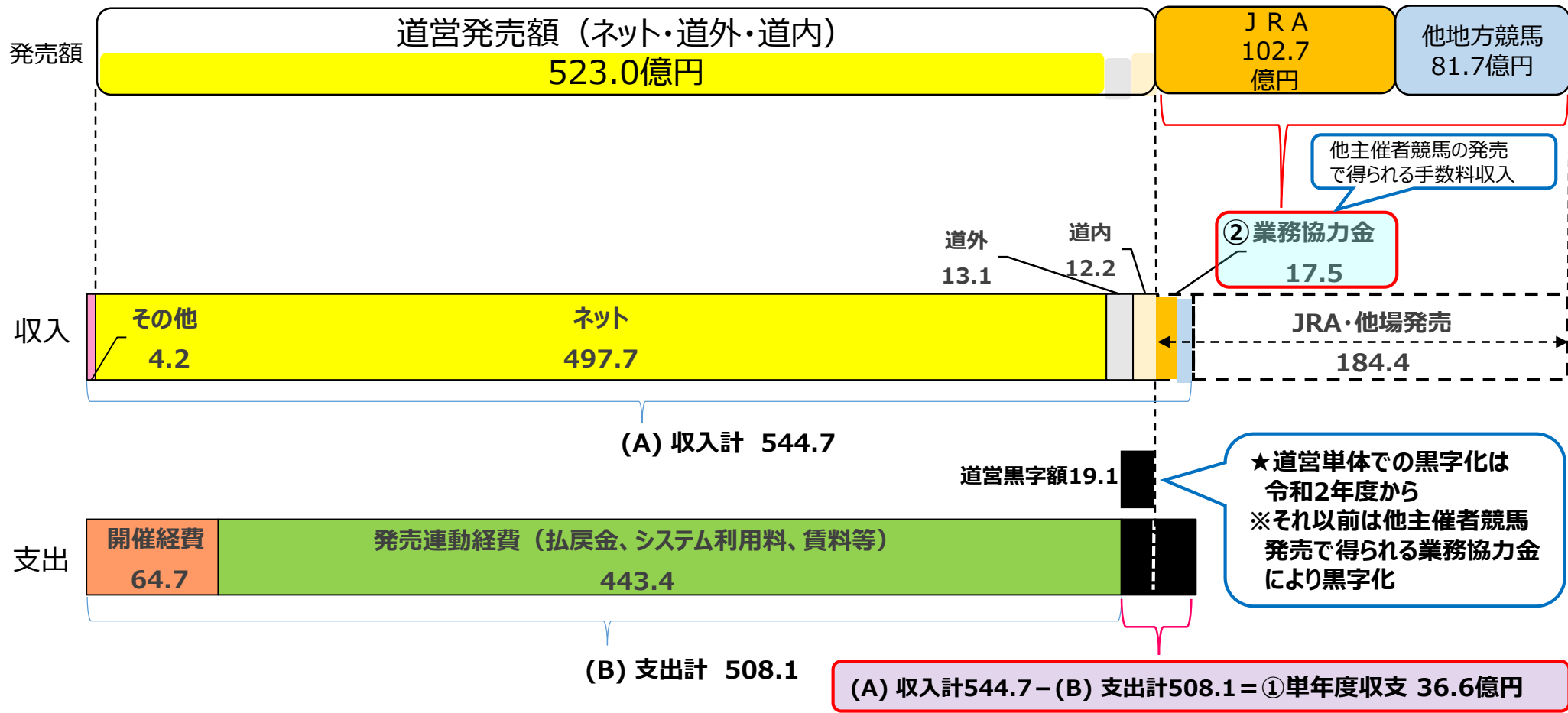


□近年の発売成績等

(単位：百万円)

年度	開催日数	入場者数(千人)	発売額(道営)		単年度収支
			金額	前年比(%)	
H3	103	1,174	45,408	101.2	+820
H4	106	1,031	37,395	82.4	▲310
H13	93	537	12,428	88.1	▲2,843
H20	82	441	11,391	95.6	▲430
H21	81	404	11,545	101.4	▲298
H25	79	272	14,017	116.8	+178
R1	80	301	33,082	131.6	+1,434
R2	82	185	52,044	157.3	+3,106
R3	82	261	52,299	100.5	+3,658

ホッカイドウ競馬の収支構造（令和3年度）



①単年度収支36.6億円 - ②業務協力金収入17.5億円 = 道営黒字額19.1億円